

新採の頃

学芸・昭和 37 年卒・豊田 賢明

退職後 15 年が過ぎた今でも、新採の頃の体験は鮮やかによみがえってくる。

昭和 37 年 3 月末、新聞によって赴任校を知った。塩江町の H 小学校だった。(随分前に上西小に統合されて今はない)初めて耳にする学校の名前だった。どこにあるのか全然わからなかった。友人も塩江町の N 小学校だった。彼も知らなかった。

4 月 2 日になっても何の連絡もない。方々に聞いてみると栗林のあたりにある讃岐出張所へ連絡したらいいという。二人で讃岐出張所へ行き赴任することになった。

4 月 4 日だったと思うが、従兄に頼んで二人の荷物を三輪自動車に積み、学校へ出発した。

二人の学校は、塩江の町から内場ダムの横を通り南に上って行った。先に友人学校へ行き、次に H 小学校に向かった。塩江の町から 10 km、バス停から 4 km、周囲を山に囲まれ谷底のようなところに道路と道路のから一段下の南側に学校があった。校舎の南に小さな運動場があり、そのすぐ南は川が流れていた。民家は学校から見上げた斜面にあった。

教員住宅は藁屋根にトタンを巻いた小さな家で、中は薄暗くきれいとは言えないもので押し入れもなかった。住宅は半分に仕切られ、隣には先輩の家族が 3 人で住んでいた。

先輩に聞くと、勿論自炊で、ふろは共同、水道もないから運動場の隅に山の水が流れてくる水槽から 30 m 程二人がバケツで運ぶという。また、店は 2 軒程あるが乾物程度なので食材は帰った時に持ってこないといけないという。

子どもは、全校で 40 人程、複式の 3 学級。職員は校長と教諭 3 名(内 1 人女性)、用務員 1 名の計 5 名だった。5・6 年生の担任となった。

宿直は二人交代、日直も当番制なので 2 週間に 1 度しか帰れないという。

当時、家々に自動車は勿論電話さえもない時代であった。交通手段は自転車が主流。

自炊をしたこともなく、複式の指導方法もわからず、何もわからない中で教員生活が始まった。しかし、この学校での 3 年間がその後の教員生活を支える原点となった。